



SIGNIS JAPAN ニュースレター

タリタ・クム！ 起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）
 代表：土屋 至
 発行所：〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42
 聖パウロ女子修道会内
 TEL 03-3479-3941 E-mail：info@signis-japan.org
 https://signis-japan.org/

主の降誕のお祝いを申し上げます！

救い主イエスの誕生、おめでとうございます。今年は、教皇フランシスコの来日という、大きな喜びをいただきました。教皇は、利益や効率を求める社会を批判し、孤立している人、社会の隅にいる人に目を向けるよう促しています。わたしたちは、貧しい人、悲しむ人のそばに立たれるイエスを知っています。彼の誕生を祝ったのは、羊飼いと動物たちでした。日本に贈られた教皇のメッセージをじっくりと味わい、行動に移していきたいと思います。



プレゼピオ カトリック浅草教会

パパ効果

晴佐久昌英神父（東京教区/シグニスジャパン顧問司祭）



長い間、重いつつ病に苦しんできた女性のことばです。

「私は、うつ病を抱えているために、やりたいことができないでいましたが、こんな私でも何か役に立ちたいと思い、いま、あるチャレンジをしようとしています。精神科医にはまだ早いんじゃないかと言われましたが、フランシスコ教皇様のお説教を聞いて励まされ、やってみようと思えました」

次は、初めて教会を訪ねてきた方のことばです。

「ネットで教皇の東京ドームミサを知り、無料だというので何の気なしに申し込んでみたら当たっちゃったので、何も知らずに参加しました。でも、お言葉を聞いてるうちに感動で涙が止まらなくなり、一度教会を訪ねてみようと思ってここに参りました」

もう一人、ご高齢の信徒のことばです。

「教皇様がお説教で、『与えられたものは、他者に差し出すためのものだ。他者に誠実に』とおっしゃったのに感動しました。私も高齢だけど何かやらなきゃと思い、家に帰ってからすぐに、孫に、教皇様のメッセージを伝えました」

3人とも、教皇フランシスコの東京ドームミサに参加した人です。ミサの数日後の入門講座で教皇ミサの感想を聞いたところ、それぞれに上記のような思いを語ってくれたのでした。その日たまたま入門講座に来た人の中だけでも、これだけの「パパ効果」があるのですから、あの日ドームに集まった5万人、さらには報道を通してメッセージに触れた一人ひとりにおけるパパ効果を合わせると、どれほどの実りになることでしょうか。パパ様、元気をなくしている日本の教会に来てくださって、本当にありがとうございました。「若いときから日本に共感と愛着を抱いてきました。日本への宣教の望みを覚えてから長い時間が経ち、ようやくそれが実現しました」とまでおっしゃっていただいて、日本のカトリック信者一同、本当に感激いたしました。

とはいえ、パパ様の「宣教の望み」が実現したというのですから、私たち日本のカトリック信者も宣教への熱意を新たにしなければ、パパ様にお越しいただいた意味がありません。一人ひとりが何らかの具体的な行動を起こさなければ、筋が通らないというものです。

そのことは、パパ様をお迎えする以前から、特に青年たちに語り続けてきました。「パパ様をお迎えするには、覚悟が必要です。直接語りかけてくださるその呼びかけに具体的に応えるつもりがないなら、教皇ミサには参加しないでください」、と。そして、そんな覚悟を示そうと、自分たちの思いを直接訴えるプラカードを、バチカン大使館前で掲げてもらいました。内容は次のとおり。「パパ様、約束します！ 難民を受け入れます！ 核兵器廃絶のために努力します！ 死刑を廃止します！ 日本のカトリック信者有志」。これを日本語、英語、イタリア語で書いたものを、ドームミサの当日、青年たちは実際にバチカン大使館前で掲げました。パパ様の車がその前を通りましたから、チラリとごらんになったのではないのでしょうか。

若い世代に、教皇フランシスコの言う「出会いの文化」を体験させることは、とても重要だと思っています。そこで、青年たちがホームレスと出会う機会を作ろうと、今まで個人的に食事を届けていたホームレスのところへ、彼らを伴って行くことにしました。この季節は冷え込みますから何か暖かいものをとということで、この一週間だけでも三回、それぞれ、さつま揚げの掛けそば、辛みそ鍋、鴨ネギにゅう麺を作って、青年たちにどんぶりを乗せたお盆を持たせ、お届けしました。ホームレスさんの喜ぶ笑顔に触れて、彼らは「出会いの文化」を体験しています。これも、パパ効果。パパ様もきっと喜んでくださることでしょう。

(カトリック浅草教会報より転載)

ヴェネチア国際映画祭に参加して

松本 准平 (映画監督)

2019年8月28日から9月7日まで、第76回ヴェネチア国際映画祭が開催された。僕は恐れ多いことに SIGNIS 賞の審査員として参加させてもらった。この大役を仰せつかるのは、1度目は2016年に香港国際映画祭で、今回が2度目になる。映画を制作する側の人間として、映画を審査する役を引き受けさせていただくことは、大変恐れ多いことであり、同時にとても光栄なことだ。映画制作というのは壮絶な仕事だ。一本一本の作品の裏に、血と涙とが隠されている。その審査というのは背筋が伸びる思いだ。

しかし、そんな立場に立たせていただくにも関わらず、(正直に言おう)、僕にとって、最大の関心事は映画以外のことだった。噂によると、ヴェネチアは最高に美しい街で、イタリア料理は最高に美味しく、映画祭には最高峰のハリウッドスターが来るそうだ。通訳として同行してくれた俳優・上山学とこんな会話をした。

「どうする？レストランでご飯食べてたら、隣がブラッド・ピットだったら？」←僕

「だよ。どうするよ。だってリド島(映画祭が開催される島)って狭いでしょ？俺話しかけられねーわ」←上山

「いやいや、俺は行くよ。だって仲良くなれる可能性ゼロじゃないわけだから」←僕

「だよ。俺もそうになったら覚悟するしかないわ」←上山

言っておくが、僕らは大真面目なのだ。

しかし実際に映画祭に行ったら、観光気分の僕らのミーハー心は、脆くも踏みこじられた。なんととっても、非常に忙しいのだ。審査員はコンペ出品作・全21本をすべて見なければならぬ。基本的に一日3本のペースだ。各作品の上映回数は限られていて、見逃すことはできない。しかも、全て英語か英語字幕で見なければならぬので、これがまたすごく疲れるのだ。

さらに追い打ちをかけるような事態があった。映画祭は前述のリド島という小さな島で開催され、美しき水の都の本島までは船で20分かかる。決められた上映時間にリド島の映画館に絶対に入場しなければならない人種にとって、本島でヴェネチア満喫など夢のまた夢なのだ。その上、映画が終わる時間が夜22時で、翌日は朝8時から上映だったりする。夜も寝る以外に選択肢がないのだ。せめてもの楽しみだったリド島でのイタリア料理は美味だったことに間違いないが、何を隠そうリド島の多くのイタリア料理店の経営者は中国人なのだ。中国人の舌は確かだと思う(中華料理は絶品だ)。でも僕は初イタリアなのだ。何か違う気がしたと言っても、どうか許してほしい。ちなみに、ハリウッドスターの多くは本島に宿泊するので、当然リド島の隣の席にはいない。

そういうわけで、意気揚々とイタリアにやってきてすぐにリド島の囚人となった僕は、映画の囚人になる道しか残されていなかった。映画の審査という大きな十字架を全身全霊で担う以外にないのである。しかし、キリスト者ならよくわかることだが、十字架を背負うことは本質的には喜びをもたらすものなのだ。

素晴らしい映画との出会いが確かにあった。受賞作となった「Babyteeth」はユニークなストーリーテリングで、人生へのまなざしは圧倒的な深みがあったし、スペシャルメンションの「Waiting for the Barbarians」は兄弟愛についての福音的なメッセージが盛り込まれていた。僕が強く推薦したが表現の過激さのために賞を与えられなかった「The Painted Bird」は、凄まじいまでに人間の罪を描き、反戦のメッセージへと結びつける驚異的な怪物だった。そして日本で映画産業に従事する僕にとって、凝り固まった視野を広げてくれる良い機会であったし、日本にも映画を批評するより豊かな視線が必要だと改めて感じさせてくれた。

そして、審査員同士の出会いこそ、僕にとっては大きな実りだ。大変なスケジュールを真摯に取り組んだからこそ、僕たちの間には信頼と友情が芽生えたのだと思う。やはり、重さは羽をもたらすものなのだ。そして、時折ご褒美もある。ブラッド・ピットには会えなかったが、大ファンのエミール・クストリツァ監督と、女優のアデル・エグザルホプロスとの記念写真はすごく嬉しかった。

SIGNIS 賞 審査員 ※敬称略

左より Sergio Perugini (イタリア)、Massimo Giraldi (イタリア) Sr. Nancy Usselmann (審査委員長・アメリカ)、松本准平 (日本) Christoph Strack (ドイツ)



松本監督 (右)



映画祭会場



SIGNIS JAPAN 2019

～この一年を振り返って～

1月

シグニスジャパンの一年は、日本カトリック映画賞選考上映会から始まります。これまでの一年で観てきた映画の中から、映画チームが候補作を2作品に絞り、シグニスメンバー、賛助会員の方も加わって作品を観た後、ひとりひとりの感想、思いを分かち合い、それを参考に映画チームで授賞作品を決めます。今年は、『ぼけますから、よろしくお祈りします。』（信友直子監督）に決定！いよいよ準備が始まりました。

もうひとつ、2021年に韓国で開催される「シグニス世界大会」に向けての韓国シグニスとの交流の始まりとして、日本のメンバーが厳寒のソウルを訪問し、活動の様子などを知る機会を得ました。

3月

若い人を中心に、「インターネット・セミナー」を開催。テーマは『SNSと福音宣教：主が霊を授けて、主の民みんなが預言者になったらいいのに』ワークショップ的な作業もあり、楽しいセミナーになりました。

3月～4月

映画賞授賞式&上映会に向けて、チラシ、チケットの印刷、そして、各教会、イベントなどに出かけてのチケット販売に忙しい日々でした。販売では、ここ数年でおなじみになった教会も多く、新しい交流が生まれています。映画賞が多くの方のご協力で成り立っていることを実感する楽しい時間でもあります。

6月

いよいよ、日本カトリック映画賞授賞式&上映会。ボランティアの皆さんに助けられて、当日を迎えました。舞台ではリハーサル、会場では座席の用意、手話通訳・要約筆記の方々もそれぞれに準備をしています。楽屋では監督を、ロビーではお客様をお迎えし、いつもながらんやわんやの騒ぎでしたが、今年も沢山の方にお越し頂きました。映画を通じて福音を伝えたい！その思いで頑張りました。

10月

日本カトリック映画賞を東京以外で上映したいという思いで、福島県南相馬市で上映会を企画しました。会場は大正時代に建てられたという由緒のある「朝日座」。現地の方と何度も連絡をし、準備を重ねてきましたが、台風19号襲来のため、やむなく中止となりました。南相馬はじめ広範囲に深刻な被害をもたらした台風です。本当に心痛む災害でした。来年こそは、上映会を開催させたい！それに向けてまた頑張ります。

11月

カトリック浅草教会にてシグニス感謝ミサを行いました。例年は7月に行っていますが、猛暑を避けたいから、今年は11月になりました。ミサの後は、Br.井手口のイタリアンパスタ、シグニスメンバーの手作りの差し入れもあり、すてきな食卓を皆で囲みました。出会えたことを感謝し、近況、シグニスへの思いなどを分かち合いました。

12月

来年の私たち活動の柱は、「カトリック映画賞」、
「インターネット・セミナー」、そして、韓国シグニスとの交流です。春頃に韓国のメンバーを日本にお迎えして、今度はこちらの活動を紹介したいと思います。新しい出会いを楽しみにしています。

2019年の大きな喜び「教皇フランシスコを日本にお迎えし、共に祈る時を過ごせたこと」に感謝します。「ババ効果」を私たちシグニス自身が発揮して、これからもメディアを通して福音を告げ知らせていきたいと思えます。



今年一年の、皆様からのご支援に心より感謝いたします。どうぞよいお年をお迎えくださいますように！

シグニス ジャパン一同



賛助会員募集

と一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」（年3回発行）をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。

どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN / info@signis-japan.org

会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至